

11

月号

2008 平成20)年
11月5日発行SCHOOL
JURIDICAL PERSON
OSAKA
SANGYO
UNIVERSITY学園ニューズレター
[ネオス] No. 1発行元: 学校法人大阪産業大学
学園振興企画部 学園広報課
〒574-8530 大阪府大東市
中垣内3丁目1番1号
TEL: 072-875-3001
<http://www.osaka-sandai.ac.jp>

特集

学園創立

80周年

1929年

●草創期、昭和4年
下寺町校舎玄関前での
記念写真

2008年

●古谷七五三理事長と
学生・生徒たちの座談会後の記念写真

創刊号

■理事長 学生生徒座談会……02

80周年はひとつの通過点——
自分しかできないことを大産大で

■学園の構成……05

■学長インタビュー……06

「学園創立80周年」大産大の未来を語る
学生力を高めるチャレンジに全力!

■大学 ピククス……09

中国の日本企業生産拠点で
大産大生初の海外実務研修を体験
エコカー開発でものづくり実感
やっています! プロジェクト 共育

■附属中学・高校 校長インタビュー……12

■大阪桐蔭中学・高校 校長インタビュー……14

■編集後記……16



「学園創立80周年」
 理事長 学生生徒座談会



80周年はひとつの通過点——

自分しかできないことを 大産大で

●やる気を引き出すプロジェクト共有

古谷 皆さんはそれぞれ、大学や学校で頑張ってくれていると聞いています。大学生の皆さん、学生生活はいかがですか？

田路 実は、私はあまり明確な目的意識がないまま入学したのですが、パリダカ参戦などのプロジェクト共有に取り組む中で、非常に充実した生活を送ることができています。学生が勉強以外のことでも自由に活動できる環境が整っているというのは、素晴らしいことですね。

池之内 私もプロジェクト共有や建築・環境デザイン学科で学科創設以来発行している広報誌「EDD」ニュースレターの制作などに取り組む中で、たくさんの友

達ができました。他の学科の友達もできましたし、先輩や後輩だけでなく、OBの方からも話を聞かせていただく機会があり、すごく楽しいです。他の大学に通う高校時代の友人は「授業だけでつまらない」と言うんですが、私は「大学でこんな活動に参加して、とっても楽しいよ」って、話します。自分の親にも、よく大学での話をしますね。

古谷 それは素晴らしいですね。私たちは、学生の皆さんが、どうすればやる気を持って主体的に学習してくれるか、言い換えると、どのようにして学生さんの能力を引き出すかということに、大きな関心を持っています。そのための取り組みの典型がプロジェクト共有ですね。やりたいという意欲、やりたいと思えるも



古谷七五三次 理事長

のがあることが重要です。人に指導されるのではなく、自分自身がこれをやりたいと希望して、自分の力で切り開いて行くから、学んだことが確実に身に付くのです。学生さんのやる気を引き出すのは、先生方にとってなかなか難しい課題です

母校を愛せる学園づくりを

が、教職員全員が力を合わせて取り組んでいます。園崎さんは、どうですか？

園崎 私は、専門学校に進学するつもりだったのですが、周囲から大学進学を勧められて、半分は周囲の後押しで産大に入学したようなものでした。でも、実際に来てみると、やはり専門学校とは違って、各分野で有名な実績のある先生方も多くいらっしゃって、そういう先生方から直接、話を聞けることが、すごく感激ですね。

古谷 そうなんです。大学の主役は学生ですが、やはり指導の先生には良い人材が必要です。ですから、たとえば経済

六釜 授業もおもしろいし、生徒会活動やその他のいろいろな行事が楽しいです。たとえば、私は体育祭で実況放送を担当していて、それは誰にでもできることではないので、やり甲斐もあります。

古谷 自分にしかできないこと、オンリーワンは大事なことです。他人と競争ばかりしているのではなく、自分にしかできないこと、自分の長所を見つけて取り組み、他人とつまらない競争や比較をしないでいいし、自分なりに一生懸命に頑張れます。産大附属高校では生徒会活動も盛んなのでしょ

う？
六釜 私は生徒会の会計をしていましたが、何でも皆で協力してやるのが普通で、いろいろな学校行事の雑用係のようなことも多いのです。それでも、地域清掃などのボランティア活動も、生徒会でこんなことをやろうと提案すると、賛成してくれる生徒が自然に集まってきて、皆で楽しく取り組んでいますね。

古谷 うれしい話ですね。森さんは、大阪桐蔭中学校でずいぶん勉強を頑張っているんですね？

森 私は、お医者さんになりたいという夢があるので、それを実現するために、中高一貫の桐蔭でしっかり勉強しようと思って入学しました。でも、勉強だけではなく、茶・華道部の活動に参加したり、体育祭で思い切り体を動かしたり、勉強以外でも充実した学校生活です。年に一度の芸術鑑賞もおもしろいし、もうすぐカナダへの語学研修もあり、ナイアガラの滝を見るのがとても楽しみです。

古谷 それはすばらしいですね。お医者さんなら、やはり人格が大切です。勉強と同時にそういう面でも自分を磨いてください。

●時代に対応、大きくなった学園

田路 ところで、今年は学園創立80周年ということで、ずいぶん長い歴史があ

ることに驚いています。学園や大学の歴史について、少し教えていただけますか？

古谷 この学園の創立者は鉄道分野の出身でした。鉄道教習所というところで教えておられた。それで、日本の社会や産業の発展のためには鉄道やその他の交通の発展が重要だと考えられて、鉄道を中心として教える学校を設立されたのです。大学は昭和25年に大阪交通短期大学として設立されました。ですから、当時の国鉄や関西の私鉄には、学園の卒業生がたくさん就職していたんですよ。その後、昭和40(1965)年に大阪交通大学が設立され、いわゆるモータリゼーションに対応して教育内容も変え、大阪産業大学と改称したのです。

田路 学部学科が次第に増えて、今の総合大学になったわけですね。

古谷 そうですね。大きな流れで言うと、交通、産業、工学という分野から、徐々に文科系学部も設置してきたわけです。工学部が6学科となり、文科系では経営学部、経済学部、人間環境学部と増えてきた。4学部13学科、大学院4研究科15課程、それに短期大学部もあるという、大きな大学になりました。

園崎 今年開設された人間環境学部スポーツ健康学科はすごく人気があって、競争率も高いと聞きました。

古谷 スポーツ健康学科は、今後の高齢化社会でスポーツを通して人々の健康管理ができる人材を育成する目的で開設しました。体を動かすことが好きで得意だという学生に、将来の活躍のための技術や能力を養成するわけです。ただね、文化コミュニケーション学科、生活環境学科を含めて、学部の理念やコンセプトをどうまとめるか、皆で相当な議論したのです。ひとつの学科をつくるというのは大変なことなんです。おかげで、予想通り多くの学生が集まってくれ、今後に大きな期待を持っていますが、他の大学と同じようなことをやっているのはダメです。六釜さんのオンリーワンじゃない



田路美羽さん

●工学部

建築・環境デザイン学科3年生



池之内香さん

●工学部

建築・環境デザイン学科3年生



園崎朝子さん

●工学部

建築・環境デザイン学科3年生



六釜安祐実さん

●大阪産業大学

附属高校3年生



森有紀さん

●大阪桐蔭中学校3年生

学部を開設する時など、当時の日本でも最高水準の先生方に来ていただいて、スタートしたんです。今年、人間環境学部にスポーツ健康学科を新設するにあたっては、すばらしい実績をお持ちの先生方に来ていただきました。六釜さん、高校では頑張っていますか？



ですが、大阪産業大学でしかできないような教育をめざそうと、先生方にも頑張ってもらっています。

森 大阪桐蔭高校は、大阪産大附属高校の分校としてできたと言いましたが、そうなんですか？

古谷 当時はね、小学生から中学生、高校生と子供の数が急激に増えて、高校に進めない子供も出てくるぞという状況になったのです。それで国や大阪府なども、各学校に定員数を増やせるなら増やしてくださいという話があり、大産大附属高校でも、大学の校地に余裕があったので分校をつくったのです。そして、いつまでも分校という扱いでは生徒たちが気の毒なので、進学に力を入れる学校として独立することになったわけです。

森 今は、国公立大学などへの進学率も高いですね。

古谷 もちろん、一朝一夕にそういうことになったわけではありません。いろいろな大学進学をめざす、いろいろな生徒に集まってもらうためには、学校の名前も変えるほうがいいだろうと、まず大阪桐蔭という名前にした。そして、生徒たちも先生方も非常に頑張り、苦勞して、学力強化に取り組んだのです。先生方などは、朝早くから夜遅くまで土曜日曜も関係なく、ずいぶん頑張ってくださったんです。その結果、自分たちでも思わなかったような優秀な大学に進学実績ができ、それでさらに優秀な生徒も集まるようになったんですよ。

●建学の精神は大きな財産

六釜 学園発祥が大阪鉄道学校だという

ことは、その流れを大産大附属高校が引き継いでいるということでしょうか？

古谷 学園の系譜ではそういうことになりますが、私は、大産大附属高校が大阪鉄道学校から引き継いだ、もっとも大切なものは建学の精神だと思っています。「偉大なる平凡人たれ」。簡単に言うと、人間は誰もが有名で優秀な人になれるわけではないのであって、平凡でも、有名でなくても、人間として世の中の役に立てる人間、周囲から信頼される人間になることが重要だという教えです。この精神は、学園のすべての学校、大学がずっと引き継いできていると思いますね。大阪桐蔭で言えば、野球の中田翔君のようなスーパースターをつくるのが目的ではない。彼のような人間を生んだことは誇りですが、それはひとつの結果であって、学校としての本来の目的は、普通に周囲から愛される人間、信頼される人間を育成することなんです。

森 大阪桐蔭高校は、文化部も全国大会に出場するなどしていますが、こういう発展は何が良かったのでしょうか？

古谷 これも、今年甲子園で優勝した野球部のことを例にとると、中田君のようなスーパースターはいなかったけれども、全員がお互いのことを考え、チーム全体のことを考えて、毎日努力を重ねた結果でしょう。結束力、チームワークを発揮できたのが強さにつながった。そして、そういうチームワークを発揮しようとすれば、ひとりひとりの人格、人間性がしっかりしていないといけません。偉大なる平凡人の理念が、部員たちに浸透していたのでしょう。プラスバン

ドなどの文化部でも同じだと思いますね。

田路 私たちの学科の広報誌、「EDD」はご覧いただいていますか？

古谷 いつも拝見していますよ。すばらしく内容の濃い、充実した広報誌ですね。六釜さん、大学の学生がこういう活動をしているのを知っていましたか？

六釜 ぜんぜん知りませんでした。誌面を見て、すごいなと感心しています。とくに私は文章を書くのが苦手なので。

古谷 専門家も顔負けで、よそに出しても恥ずかしくないと思います。制作には苦勞もあるんでしょう？

池之内 私は、こういう記事づくりのことを何も知らずに取り組みはじめました。先生や先輩からもいろいろ教えてもらいますが、自分で見つけることのほうが多くて、日々、苦勞と喜びの連続ですね。

古谷 だからこそ自主的に、自分で考えて取り組むという姿勢が養われるわけですね。苦勞は多いでしょうが、そこを頑張ることが、あなたの成長につながるでしょう。すばらしい活動ですから、しっかり後輩たちに財産として伝えていってください。

園崎 80周年を迎えて、今後のことはどうお考えですか？

古谷 80年はひとつの通過点ですね。100年も200年も続いてこそ価値があるし、そのために何をすべきかと、常に私たちは考えています。皆さんが、卒業して良かった、母校を愛したいという気持ちになれるような学園にしたいですね。今日は、皆さんにお会いできて感激しました。皆さん、語彙も豊かだし、表現力も確かです。それぞれに自分の課題を持って努力している。皆さんのような生徒や学生がもっとたくさん増えてくれたら、うれしいと思います。学校や大学に要望があれば、遠慮せずに、私のところに言いに来てください。「EDD」ニュースレターの取材でも来てくださいよ。

一同 はい。ありがとうございました。

学園の 構成

中学校から大学院まで 後援会・同窓会も充実

学校法人大阪産業大学

学校法人大阪産業大学(経営母体)は、大阪産業大学、大阪産業大学短期大学部、大阪産業大学附属中学校・高等学校、大阪桐蔭中学校・高等学校、大阪産業大学附属歯科衛生士学院専門学校の7機関を有しており、これらを総称して学園と呼んでいる。



各機関の後援会・校友会・同窓会組織

●大阪産業大学後援会

(大学院・大学・短大学生の保護者の会)

大学と家庭との連絡を密にし、学生の福利厚生に対する援助と大学の発展に寄与することを目的に1974(昭和49)年に設立されました。全国に8支部が結成されています。
◇会員総数9551人(2008年4月1日現在)

●大阪産業大学附属中学校高等学校後援会

(中学校・高等学校生徒の保護者の会)

会員相互の連携・協和を図り、本校生徒の福利を増進し、教育目標の達成に協力・援助を惜まず、本校の振興発展に寄与することを目的に設立されました。
◇会員総数2116人(2008年5月1日現在)

●大阪桐蔭校友会

(中学校・高等学校生徒の保護者の会)

会員相互の連携・協和を図り、生徒の福利を増進し、教育目標の達成に協力・援助を惜まず、本校の振興発展に寄与することを目的に1986(昭和61)年に設立されました。
◇会員総数2724人(2008年5月1日現在)

●大阪産業大学校友会

大阪交通短期大学及び大阪産業大学、大阪産業大学短期大学部の卒業生により1970(昭和45)年1月1日に結成され、その後、大阪産業大学大学院修了生を統合しました。全国各地と海外に38支部が結成されています。
◇会員総数7万3557人(2008年4月1日現在)

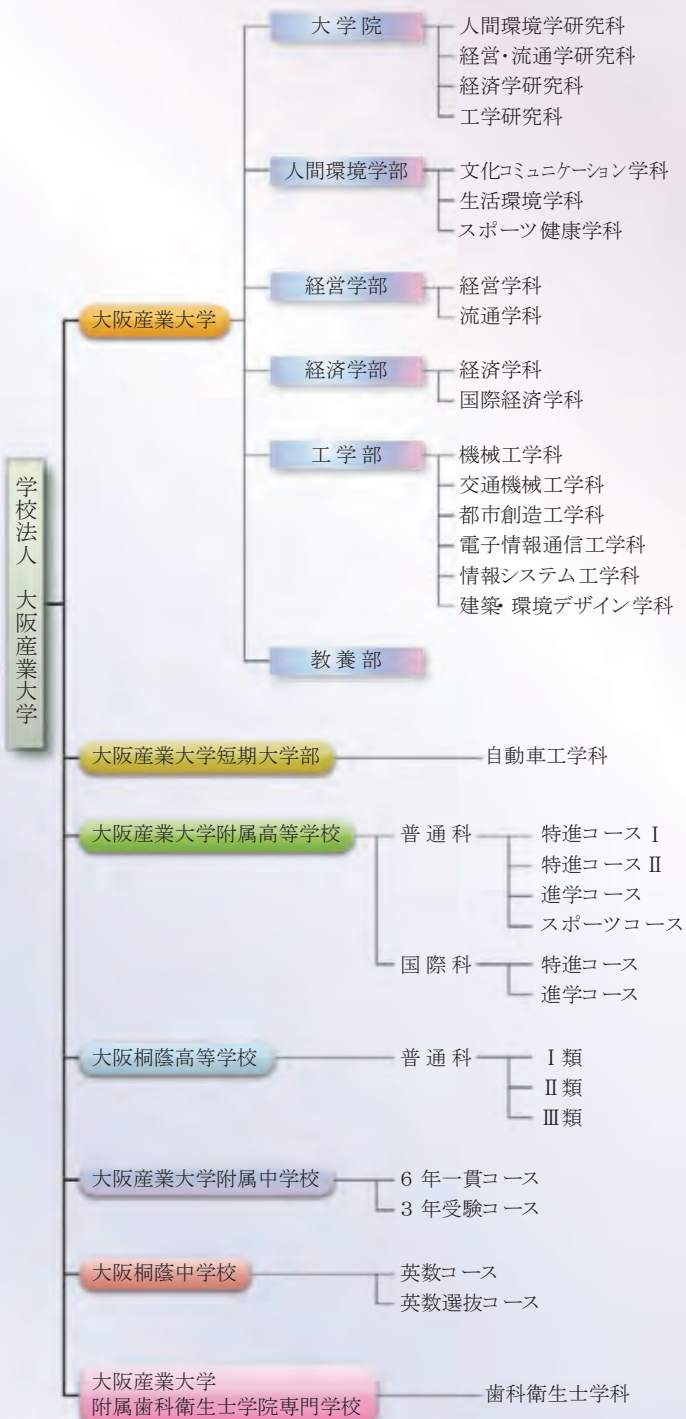
●大阪産業大学附属高等学校同窓会

大阪鉄道学校の卒業生により1933(昭和8)年に結成されました。その後、大阪第一鉄道学校、大阪第一中学校、大阪鉄道中学校、大阪第一高等学校、大阪鉄道高等学校、大阪自動車工学専門学院、大阪自動車高等整備学院、岡山自動車高等整備学院、大阪産業大学高等学校の卒業生を統合しました。1996年4月の校名改称により、現在の名称で運営されています。
◇会員総数4万7482人(2008年4月1日現在)

●大阪桐蔭高等学校同窓会

会員相互の交誼を図り仁徳の研さんに努め、以って母校の発展に寄与することを目的に、1988(昭和63)年11月に設立されました。
◇会員総数8324人(2008年4月1日現在)

●学校法人大阪産業大学の構成図●



●大阪産業大学附属歯科衛生士学院専門学校同窓会

母校の発展を助け、会員相互の親睦と融和を図り、資質の向上に寄与することを目的に1986(昭和61)年4月に設立されました。
◇会員総数1382人(2008年4月1日現在)



「学園創立80周年」——大産大の未来を語る

学長インタビュー



学生力を高める チャレンジに全力!



今年は学園創立80周年。

節目の年に、大学の将来像を描く籠谷正則学長にインタビューした。

学長は新しい教育方法の具体的なプランを示しながら

「学生力を育てるためのチャレンジに全力で取り組む」と決意を語った。

大阪産業大学学長 籠谷正則

●聞き手 —— 大学院工学研究科アントレプレナー専攻1回生・真野智之
「NEOSU」編集長・山名康弘

問題解決能力とコミュニケーション力です。この二つが社会人として求められている能力。これを育てるためにはプロジェクト共育が最も有効だと考えています。プロジェクト共育とは、社会人基礎力をつけるため講義やゼミとは別に本学が独自に取り組んでいる教育プログラム。教職員や学生が提案した魅力あるテーマに対して、学生が自由に参加し、自主的に取り組んで問題解決能力を養うもの。プロジェクト共育の実践には自信を持っているし、成果も目に見える形で出はじめている。参加した学生は確実に成長し、社会からの評価も高い。就職もすぐに決めてくるほどです。

——プロジェクト共育で学生はどう成長するのですか。

プロジェクト共育は正課の授業と違って、どちらかというとクラブとよく似ています。学生が自分の好きなテーマを選んで、自らの意思で取り組める。好きなことをやるので楽しい。時間を忘れて没頭できる。達成目的がはっきりしている

のでやりがいがあるし、目的に向かって自ら挑戦し、問題を解決する能力を磨くことができる。4年間取り組みれば社会人としての基礎力が自然と身につき、大きく成長しています。

——プロジェクト共育の効果は分かりましたが、現状では参加者が多くないのでは。

確かに参加者は全学生の5%程度かもしれない。もっと多くの学生に参加させ

——大阪産業大学は将来、どういう姿になるべきだと思いますか。

大学にブランド力をつけ、受験生の目をこちらに向けさせるようにする。社会的評価を高める。これを実現するには、何よりも学生力を高めることです。

——学生力を高めるとは。

学生をどれだけ成長させられるか。学生の立場から言えば、入学時から比べてどれだけ育ったか。どれだけ力をつけたか。学生自身が成長を実感し、社会がそれを評価してくれるれば大産大の学生力が高まったといえます。

——成長の内容は。

新学部構想へ
モノの周辺にある要素などを
総合的にデザインできる学生を
育成したい

問題解決能力と コミュニケーション力を育てる プロジェクト共育



たい。将来はプロジェクト共育を教育のメインに据え、単位を与えることを検討したい。これをやらなければ、大学の将来という意味で、次につながらないと思っている。

——学長が描く将来の大学像をどう具体化するのですか。

新学部を創設する。2010年春をめざして設置の準備を進めている。工学部の一部を移行させる形で開設する理系学部だが、文系学生や女子学生も多数来てくれるようにしたい。ものづくりが好きなら、高校で数学や理科が苦手だった学生も拒まない。ものづくりだけではなく周辺を含めトータルに学べる内容とする。人やモノを取り巻く環境や生活、経済的要素などを総合的にデザインできる人材を育成したい。

——その新学部に学長が提言する学生力向上の教育方法を盛り込むわけですね。

そのように考えています。まずプロジェクト共育をベースに据える。学生力をつけるためには、学生一人一人をみ

んなで見守り、面倒を見る態勢が必要。まず教員が4年間学生のケアができる担任制を導入する。担任が授業の一環としてホームルームを行う。1年生から4年間通して卒業研究をするようなもの。学生は毎日の勉強や研究結果、反省点を「日報」という電子的記録として書く。日報は教員だけでなく先輩や同僚にも公開され、アドバイスを受ける。一方、先輩学生が手取り足取り指導するエルダー制を導入する。こうして学生が成長するための万全の体制を整える。

——学生としては先生の指導も大切ですが、年齢的に近い先輩の姿はあこがれ。その先輩が身近で指導してくれるのはありがたい。文系学生のケアはどのように考えていますか。

数学・理科を選択しなくてもよい入試を行うので、数学・理科が苦手な文系学生が入ってくる。その対策として習熟度別教育の導入も考えている。新しい教育方法を開発することも必要かも知れない。もちろん入学前教育は手厚くやるつ

もりです。

——大学全入時代を迎えて、どこかの大学でも学力低下が言われています。学長としても学力低下は感じていますか。

感じています。学力低下もあるが、勉強の仕方を知らない学生が増えている。授業で黒板をノートに写したり、先生の話を書き留めるという基礎的なことさえ知らない学生がいる。そこから教える必要があるということです。

——こうした学生にどう対応するのですか。

基礎的な勉強方法さえ知らない学生を放置しておく、大学の授業についていけず、離学につながります。基礎学力をつける態勢を構築しなくてはならない。難しい問題だが、端緒はある。学園内に中学・高校を持つメリットを生かして、中高と連携する道を探れないだろうか。大産大附属高校の先生は「卒業生には、勉強・学生生活の指導をします」といつてくれている。こうした連携が実現すれば効果は大きい。

学長インタビュー



——大学側ではどんなことをできると考えていますか。

まず学生一人一人を把握することで。教員の担任制やエルダー制が有効ですが、学生の学力不足やその悩みに早く気づくことが重要です。その上で、エルダーをつけてマンツーマンで指導するなどの対策をとることができます。

——大産大生の就職状況についてどう考えていますか。

一流企業といわれるところに結構就職している。コミュニケーション能力や問題解決力など社会人基礎力を身につけた学生は、社会からも評価されます。その意味では、学生力を向上させれば、就職でも結果がついてくると考えています。

——大学としての就職対策は。

就職相談を充実させ、学生の希望を尊重して満足の得られる結果を出す必要があります。就職は卒業生の存在が大きいと思うので、卒業生とのきずなを大切にしたい。企業訪問で卒業生を訪ね、顔を合わせて企業の状況を聞いてくることを勧めています。教員も就職した卒業生のアフターケアをしっかりして、企業や卒業生との繋がりを強めて欲しい。

——就職における学生の満足度はどうでしょう。

ある学科の就職状況がダントツにいい。これは就職窓口になっている職員ががんばっていることもあるのですが、何より学生の希望が明確なこと、目的意識がはっきりしているのが理由です。やりたいことができるのであれば、規模の大小は問わない。小さな企業でも、やりがいがあれば満足なのです。こういう就職が最も満足度の高い就職といえる。大学



もともと就職を希望している学生は多い！

としてもこういう就職をして欲しい。

——学長は大産大の卒業生です。学長の学生時代と比べると、今の産大生をどう感じていますか。

今の学生ははじめに大学に来るが、おとなしすぎる、という印象です。私たちのころは、パンカウな学生が多かった。友達と徹夜でレポートを作成してでも単位を取る、というどん欲さがあった。今の学生ももっと「やんちゃ」になって欲しい、と思います。

——今の学生はどん欲さが無いという評価ですが、具体的には。

試験問題でも分かるところしか書かな

い。あとは空白だ。何が何でも解答用紙を埋めようとしな。授業はまじめに出席してうなずいているが、結局、分かっていない。何のために大学に来ているか、という目的がはっきりしていないのではないか。

——そうした学生に望むことは。

大学の中に自分の居場所を作りたい。研究室、クラブ、サークル、どこでもいいから自分の拠点を作ろう。その居場所に行けば、仲間がいるし、やるべきことがあるし、何より楽しいという拠点。これができれば、学生にとっての大学の意味が変わるはず。大学に来る目的が明確になります。有意義な学生生活を送って欲しいと願っています。

●インタビューを終えて



学生としてもできることある

たがそれゆえの喜びと成長を知っています。ですから、どうすればプロジェクトへの参加学生を増やすことができるかが、学生リーダーとして一番話しあいたかった内容でした。

覇気もなく、アルバイトや恋愛、授業の愚口の話ばかりしている学生たちでも大学に集まって楽しく過ごせ、特別な意味が持てるように、学内の居場所やプロジェクトを作るため、学生としてもできることがあると考えています。大学もプロジェクトを気軽に楽しめる場所、見つける機会をPRして欲しいと思います。

(真野智之)

私が一番感じたのは、こうしたら大学がもっと良くなるだろうという私たちの考えが、すべて学長のビジョンの中にあっということです。学生の居場所の大切さ、授業についていけないとやる気が下がることなどを学長はしっかり理解して改革を進めようとしています。

私は大学編入時から3年間、電気自動車(EV)プロジェクトに所属し、苦勞しまし



情報システム工学科4回生
村上貴哉君に聞く

日本企業の海外生産拠点で学生が実務体験研修を行う初のプログラム（海外インターンシップ）に情報システム工学科4回生、村上貴哉君が派遣され、9月に中国のパナソニック杭州とソディック厦門（工作機械メーカー）の2社で体験研修を行った。

この試みは大産大が初めて実施するもので、他大学もまだ行っていない。受け入れ企業のパナソニックやソディックにとっても初めてのことで、たいへん注目された。

そこで、村上君に早速インタビューし、その成果を尋ねた。（情報システム工学科4回生 永井有梨江）



●ストーリー作りが大切

——初の海外での企業研修というチャンスをつかんだとき、どう思いましたか？

村上 絶対に行きたい!! という思いと、生活習慣・文化の違いに対する不安が頭をよぎりました。とくに今回の研修先が中国で、北京オリンピックに関連してのテロニュースが連日流れていたため、怖さも感じていました。

——どんな研修をしてきましたか？

村上 今回、僕はソディック（厦門）とパナソニック（杭州）の二つの企業で12日間ずつ研修を受けてきました。ソディックでは、その製作全体のラインを工程ごとに体験させてもらいました。パナソニックでは、自社製品と他社製品の比較調査の補助的作業を担当し、製品についてより深く学ぶことができました。

——とくに印象に残っている研修は？

村上 ソディックでの放電加工機を使ったハーネス（電源コード）作りです。初めて自分の手で“もの”を作ったということもありましたが、中国語での指導だったので、理解できるまでに、とても時間がかかりました。担当の方もゼスチャーで一生懸命、僕も理解しようと必死でした。理解できるまで20分くらいかかりました。でも、教えてもらっていたことが実はすごく単純なことでした。日本語だったら、10秒くらいで理解できるような内容だったんです。語学上の問題で理解が大変だったんですが、僕の頭が良くないからと勘違いされていたらしくです。



ソディックでのハーネス作成

中国の日本企業生産拠点で 大産大生初の海外実務研修を体験



ソディックでの
電流・電圧チェック

ね。やっぱり語学能力は大切です。

——大学の講義では学べないと思ったことは？

村上 パナソニックでの製品の比較調査です。今まで知らなかった製品の細かい部分まで知ることができました。パナソニックの製品開発担当者の方々に直接指導していただけたので、とても分かりやすかったです。その時に所長さんが言われていた「何をするにしても常に目的を持って取り組むようにせよ。そして、自分でその取り組みについてのストーリー（一連の流れ）を作れ」という言葉は心にさざりました。こういった企業の方の考え、言葉を直接聞けたことも貴重な経験でした。

●「世界の工場」の現実を見た

——研修中頑張ったことは？

村上 ホテルに戻ってからも、研修で学んだことをノートにまとめました。ひとつひとつ絵も付けました。パソコンではなく、自分の手で書き留めていったことで、しっかり復習することもできました。

——研修以外で楽しかったこと、驚いたこと、「知られざる中国」と感じたことは？

村上 夕食は企業の方に連れて行ってもらっていました。そこで遭遇した「乾杯」には驚きました。日本では最初の乾杯が終わった後、自分のペースでお酒を飲みますが、中国では違いました。乾杯をしたらコップに入っているお酒を一気に飲まないといけない。さらに、誰かの乾杯の声があがったら、みんなそれに付き合わないといけないんです。この中国式乾杯で相当なお酒を飲まされました。助かったことは、コップの大きさが小さめだったことです。

——研修で学んだことをどう生かしたい？

村上 自分が人間としてまだまだと感じた部分がありました。常に何をするにしても目標を持つこと、ストーリーを考えることが特にそうです。まずは、これを卒業研究で実行していきたいと思います。それ以外にも、中国も含めアジアで日本がこのように製品を作っている現状、中国が「世界の工場」という現実を目の当たりにしました。社会に出る前にこういった感覚を先取りできたことは、今後の自分にとっても価値のあるものだと思います。もっと多くの学生の皆さんにもぜひ、体験してもらいたいの、そういった機会をたくさん設けていただきたいと大学にはお願いしたいです。



パナソニックの方と記念撮影



スタンフォード大生
in DAISANDAI

エコカー開発で ものづくり実感

●留学生ラム君

米国カリフォルニア州の名門、スタンフォード大学からの交換留学生がこの夏、大産大工学部交通機械工学科の山田研究室で学んだ。スタンフォード大機械工学専攻アカデミックコースのマイルス・ヤング・ラム君(20)だ。

山田研究室は、環境に優しいエコカーを開発している研究室だ。ソーラーカー、電気自動車、燃料電池自動車、乾電池で動くオキシライドレーサーなどで、国内外問わず注目度も高い。

今回彼が主に学ぶ舞台は、山田研究室の須藤先生(昨年度オキシライドレーサーを開発し、今年度から新車両を開発中)がリーダーを務める超軽量ビークル開発プロジェクトである。

このプロジェクトは、カーボンファイバー等の複合材料や、ハニカム材等を使用した車両軽量化技術を駆使し、より少ないエネルギーで走行出来る車両を開発している。クリエイティブでカーボン成型を行っていたラム君に聞いた。



●尊敬できる先生ら

——大産大に何を学びに来ましたか？

ラム スタンフォード大では、工学のことをたくさん学んできましたが、講義では学べない、ものづくりの技術を経験してみたくて来ました。特に自動車が好きなので、ここでの実際の車両開発はとても興味深いです。

——大産大の印象はどうか？



留学生と 日本人学生の輪！

国際なかまプロジェクト <http://kokusainakama.daa.jp/>



多彩な交流

学生の社会人基礎力向上をめざして始まった「OSUプロジェクト共有」の活動が、活発化しています。授業やゼミ以外の「もうひとつの大学教育」として大産大の特色となっています。その取り組みをメンバーの学生自身に紹介してもらう「やっています！プロジェクト共有」。最初は「国際なかま」の活動報告です。

大産大の留学生はなんと約1300人。全国でも4番目の多さです。キャンパス内を歩けばいたるところにその姿が見られます。ところが、留学生と日本人学生はそれぞれが固まってしまう、交流は全くといっていいほどありません。非常にもったいないことではないでしょうか。

そこで、今年度から発足したのが「国際

なかま」プロジェクトです。このプロジェクトは大学が推進するOSUプロジェクト共有のひとつで、留学生と日本人学生との壁を壊し、気軽に話し合い“国際なかま”になるために現在さまざまな活動を行っています。

「国際なかま」のメンバーが大学主催の「2008年度新入生歓迎会」(4月17日)の運営スタッフとして協力しました。各国の留学生が集まり、伝統的な歌やダンス、今はやりの歌などを披露しました。話をしながら昼食をとり、ビンゴゲームで盛り上がり、いろんな国の友達をつくることができました。

次に、ミャンマーサイクロンや中国四川省大地震の発生に私たちは驚き、大いに心を痛めました。被災者支援のために何かできることはないだろうかと考え、緊急募金

活動を行いました。5月16、17日は大学内で昼休み時間帯に、24日は住道駅と京橋駅で、25日には大阪駅と天王寺駅でそれぞれ募金活動を行いました。当初は不安でいっぱいでしたが、声を張り上げて呼びかけると、多くの方が募金して下さい、人の温かさを改めて感じる事ができました。「ちりも積もれば山となる」で、少しずつの募金もたまっていくと大きなお金になることを学ぶことができました。

集まった100万円以上の募金は折半し、6月10日にミャンマーサイクロン分を日本

災害救援募金も

stanford Univ.
California

ハニカムの切断作業



ラム クリエイトセンターは、設計から、加工までをすべてひとつの教室で出来る。こういう設備はすごく良い環境だと思う。須藤先生らも、何を聞いても答えてくれる。知識と経験がとても尊敬できる。学生たちもやさしいので作業が楽しいし、分からない事はすぐ聞ける。

——ここでは驚いたことや、スタンフォード大と違う点は何ですか？

ラム 先生方が、朝から夜遅くまで頑張っている。もちろん学

生も遅くまで作業していて活気がある。クリエイトセンターにシャワーがあるのはびっくりしたが、夜遅くまで作業する時は助かりますね。でも、山田研の研究室や作業室が離れているので、移動はタイムロスですね。

——学んだ事を、帰国してどのように生かしたいですか？

ラム 実際に経験した、ものづくりの技術を知識と一緒に伸ばしていきたい。車を開発する流れなども分かったので、活用したい。

●大産大の技術力を証明

ラム君の両親は中国人だが、本人は生まれも育ちも米国ニュージャージー州。日本語とは無縁だったが中学、高校で日本語を学び、日本語はペラペラ。日本語の受け答えもほぼ完璧にこなせていた。大産大でのラム君の生活は午前9時から午後9時までみっちり車づくりに熱中している。大産大の学生は車好きが多く、話が合い、プライベートでも大産大ライフを楽しんでいる。うどん、うなぎなど日本食も大いに気に入り、もちろん米国にいる彼女への連絡は欠かさない。

ラム君のような世界的有名大学の学生が、大産大に注目し、学びに来てくれたことは、大産大生としてうれしい限り。大産大の技術力の高さが証明されたと実感した。

アントレプレナー専攻1回生 真野智之

文化・スポーツ・地域・料理…

赤十字社に送金。18日に中国領事館を訪問して中国四川省大地震分を寄付させていただきました。

6月1日には、第1回社会見学を実施。万博記念公園の国立民族学博物館とアサヒビー

ル工場を見学しました。留学生中心に95人の参加者があり、皆さん満足そうでした。

プロジェクトには、現在53人のメンバーがいます。国籍別の人数は日本12、中国13、タイ7、韓国10、ミャンマー4、ベト

ナム2、モンゴル2、ネパール2、ドイツ1。毎月一度の全体会議で意見交換をしています。8月には大学近隣の中学校で各国の料理を作り、試食会を行いました。11月の大学祭に模擬店出店を計画しています。

また、体育館を借りて留学生の運動不足の解消と健康増進を目的にバレーボールやバドミントンなど5種目の運動に汗を流しています。このうち、数種目については大学祭での球技大会出場を目指しています。

活動メンバーは随時募集中。国籍不問、文化交流やボランティア活動に興味を持っている人を歓迎します。

●国際なかま 書記・広報

経営学部3回生 高村沙希

工学部3回生

スィフブーム・ジャンター



国立民族学博物館の見学

時代のニーズに応え、 多様な生徒が集い 一体感も保てる学校に

●個性と希望を尊重する教育

——大阪産業大学附属中・高等学校の発祥は、大阪鉄道学校だったということですが。

平岡 大阪鉄道学校が設立された昭和3(1928)年ごろ、鉄道というのは時代の最先端を行くハイテク産業だったので。人や物の移動手段としてもそうですが、通信技術などもかなり進んでいた。そういう鉄道分野で活躍できる人材を育成すべく、設立された学校が本校の起源なのです。開校後の数年間は志願者が殺到したという話を、創立者である瀬島源三郎先生の秘書をしていた方から聞いたことがありますね。

——その後、いわゆるモータリゼーションなどの流れの中で、教育内容も変化してきたわけですね？

平岡 どんな学校でも、時代の要請に応じてつくられ、時代の変化に対応して教

育改革を進めるものです。本校もまさにそうです。おっしゃるような自動車社会の進展に対応するというのもそうですし、学制改革への対応もありました。また戦後、社会が豊かになるにつれて大学進学率が高くなり、とくに将来、事務系の職業に就くことを希望する子供たちの間では、高校は普通科で学び、将来の職業上必要な知識は大学で、より専門的に学ぼうとする傾向が強くなりましたから、本校の学科編成もそういう動きに対応したわけです。

——昭和63(1988)年に商業科の募集を停止したことなどは、そういう背景があったのですか？

平岡 商業系や土木建築系の志願者が減少し、普通科の志願者がぐっと増えてきたのです。就職の面から見ても、それ以前は、およそ学年1000名中500名が就職希望で、企業からの本校への求人も1500～2000社あったのです。しかし、



大阪産業大学附属中学校・高等学校
平岡伸一郎 校長

土木・建築や工業などモノづくりの現場からの求人は比較的、続いたのですが、事務系を中心に徐々に求人が減少していった。その分、大学への求人に移行したということでしょう。大東に分校ができた昭和50年代あたりから、保護者の方からも大産大への進学希望が多くなりました。

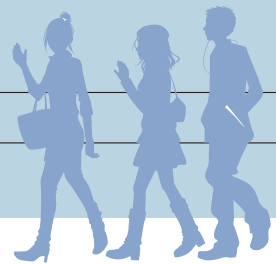
——学科編成替えは教員配置など難しい問題もあるでしょうが、改革は円滑に進んだのですか？

平岡 商業系、工業系の学科を徐々に縮小し、普通科や国際科を拡充するという対応で、比較的スムーズに改革は進めることができました。そのため、志願者のもっとも多かった昭和60(1985)年から平成元(1989)年にかけての時期など3000人もの受験生があって、椅子と机をレンタルしてきて体育館で試験を受けてもらったこともありました。試行錯誤はしつつも、保護者と生徒、志願者のニーズ、そして時代の要請に応えたと思いますね。

——その後、特進コースやスポーツコースの設置などもありましたが、現在の産大附属高校の良さというのは何だとお考えですか？



大阪産業大学附属中学校・高等学校



平岡 ともかく、生徒ひとりひとりの個性と希望を尊重し、できるだけそれに応える教育で、それぞれの能力を伸ばすという点でしょう。今、本校には普通科と国際科があり、それぞれに特進コースと進学コースがあり、普通科には男子生徒だけのスポーツコースもあります。特進コースでは7時間と8時間の授業があるし、夏休みも勉強のために登校する生活です。スポーツコースなら、毎日午後6時以前に、練習着から制服に着替えて下校するということはありません。国際科なら、勉強もクラブ活動も自分の希望に応じて頑張り、海外研修にも積極的に参加する。また、不登校ではないけれども、多くの生徒といっしょに長い時間授業を受けるのが苦手だという子もいて、そういう生徒には教員の指導のもとで自主的に勉強できるような体制も作っています。生徒の希望や個性、状況に応じて、さまざまな生き方、学び方を用意しているのです。

●自信と誇りを持てる生徒に

——大切な自然の生態系のように、非常に多様性に富んでいると言えますが、先生方にすれば指導は大変でしょうね？

平岡 大変ですが、それに値するだけの成果があります。スポーツで全国大会に出場する子もいれば、国立の難関大学に進学する子もいる。そういう、それぞれの頑張りや生の姿が他の生徒にも見えますから、生徒がお互いに大変よい刺激を与え合うことができるのです。コース制で補足しますと、どのコースに入るかは入学時に決めてもらうのですが、若い高校生ですから、入学後に持っていたイメージとは違ったという場合もあります。そこで、入学前に決めたコースは絶対に変更不可能ということではなく、条件が整えば、入学後にコース変更ができる制度も設けています。実際、コースを変える生徒もいますね。

——平成13(2001)年からは、中高一貫での教育がスタートしていますね。



05年の選抜高校野球出場時の人文字

平岡 やはり、大学進学を考えた場合、そのほうが生徒にとっても効果的な学習ができますからね。ただこの中高一貫制度でも、本校は生徒の希望や個性を尊重しています。産大附属高校への進学だけでなく、大阪桐蔭高校や他の府立高校などへの進学もできるように、そのサポート体制も整備しているのです。さらに、他の中高一貫校では、中学から他の高校を受験する場合、その時点で内部進学への道が絶たれることも多いようですが、本校ではそういうこともせず、追加募集で必ず内部進学はできる制度も設けています。生徒の希望やチャレンジ精神をできるだけ尊重してあげたいのです。もちろん、理想は高校のレベルをさらに高くして、中学から全員が進学してくれるようになることですが、理想は理想として、今の段階で、生徒ひとりひとりの可能性の芽を摘むようなことはしない方針です。

——それだけ多様な生徒がそれぞれに活躍するのは素晴らしいことですが、学校としての一体感を保つという点では難しいのでは？

平岡 平成17(2005)年に選抜高校野球に出場した時、教員が心配したのは、あの甲子園での応援をうまくやれるのかということでした。甲子園では各地の伝統校が立派な応援団を編成して、全員一体となって練り上げられた応援を展開す

る。ああいう応援ができるかなと。また、出場が決まって新聞社が校庭での人文字を航空写真に撮ることになった時も、生徒全員が自主的に、真剣に参加してくれるのかどうか、不安もあったのです。しかし、撮影当日になると、生徒全員が自然に集まってくれ、撮影が長引いたのに誰も文句も言わず、じっと辛抱してくれました。終わった瞬間、教員の間からよくやったと拍手が起きたのですが、我々教員が思っていた以上に、生徒たちは成長してくれていたのです。やるべき時には、自信と誇りと参加意識を持って、何でもきちんとやってくれる生徒たちだった。もちろん、甲子園での応援も立派にやってくれました。

——80周年を迎え、学校として、ひとまず態勢は整ったということでしょうか？

平岡 普通科と国際科という体制になって数年たち、学校として安定してきたことは事実です。産大やその他の大学への進学をめざすための中高一貫校だという位置づけも定着してきましたし、環境も整ってきた。一時、高校でも入試科目を減らすのが流行になりましたが、本校では将来の大学受験や実社会でのことを考えて、やはり5科目を必須としています。今後もさらに学園としての発展と、何より生徒たちの未来のために、改革は続けて行きます。



大阪桐蔭中学校・高等学校
森山信一 校長

●学校の責任でやる気引き出す

——大阪桐蔭高校は、大阪産業大学附属高校の分校として設立されたと聞きましたが、当時の模様を。

森山 今からちょうど25年前のことです。社会全体の高校就学人口の急増に対応して分校が設立されたわけですが、やがて就学人口が減るのはわかっていました。そうなった時、何も特長のない学校では生徒たちにとって魅力がない。そこで、進学に力を入れるべきだと考えて、生徒の学力向上、進学実績の拡充に取り組むことにしたのです。その一方で、産大附属高校で盛んだったラグビー部と野球部が分校に移管されたので、スポーツ

高い目標設定と努力で成果 進学、スポーツとも着実に

でも確かな実績をあげようと思いました。
——たとえば生徒の学力向上と言っても、簡単なことではなかったのでしょうか？

森山 まず、「目指せ！国公立」「目指せ！関関同立」という明確な目標を打ち出しました。高い目標を設定して、生徒も教員もそれに向かって努力する。教員が生徒のやる気を引き出し、基本をしっかりやって行けば、必ずモノになるはずだという信念です。最初は補習をさぼって帰ろうとする生徒を、駅まで追いかけて連れ戻すといった状況もありました。しかし、予習も復習も授業時間中にやるという発想で100分授業の実施や、机の前に座って勉強する習慣をつけるため新聞の社説を書き写す、そういった学習態度の養成から始めて、それが徐々に実を結び始めたのです。

——具体的にはどのような成果が生まれ

ましたか？

森山 たとえば、産大高校本校との合同実力試験でも、分校の生徒たちが立派な成績をあげるようになりました。また、入学当初は10段階評価の3程度の成績だった生徒、つまり勉強にあまり関心のなかった生徒が、夕方、帰宅するためのバスの待ち時間に、一生懸命に単語帳を見ているといった状況も出てきたのです。進学実績でも、次第に目標レベルの大学に合格者を出すようになりました。
——何が一番良かったとお考えでしょうか？

森山 もちろん、生徒たちが頑張ったことが一番です。しかし、先ほども言うように、「目指せ！国公立」「目指せ！関関同立」という明確な目標を打ち出し真剣に努力することで、教員も頑張れた。当時の本校の実力からすれば笑う人もあったかも知れないし、そういう宣言は教員にもプレッシャーだったでしょう。しかし、それをやらないと学校は伸びない。目標に向かって努力し、ある程度の実績、成果が出れば、生徒にも教員にも自信が生まれ、さらに次の目標に向かって努力できる。学業もスポーツも芸術も、同じだと思います。

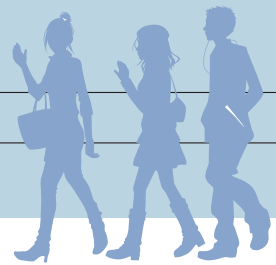
——生徒のやる気を引き出すのも大変なことだと思いますが。



大阪桐蔭中学校・高等学校本館



今年、夏の甲子園で優勝した野球部



学の段階から目標意識を持っている生徒のほうが、指導はしやすいですから。ただ、開設時期としては他の学校よりも2、3年は遅かったのです。中高一貫教育の成果が出るまでには6年、7年かかりますから、その成果として大きく実績が伸びてきたのはここ数年のことで、この先、もっと伸びるだろうと見ています。

——スポーツでも野球部をはじめ、大活躍が続いていますね。

森山 分校発足当時、体育コースで掲げた目標は、「目指せ！甲子園」「目指せ！花園」でした。その後、ゴルフ部、卓球部、サッカー部なども順次、創部されて、どのクラブも目標は全国制覇や全国大会出場です。目標達成のためには今、何をすべきかを考え、計画を立てて、良い指導者を招く、練習環境を整えるということを着実に実行しました。その成果が、たとえば野球部の今年の全国大会優勝です。ラグビー部も今年おそらく全国大会に出場できるのではないのでしょうか。サッカー部も大きな大会三つのうちすでに二つを制覇しています。卓球部、ゴルフ部も全国大会の常連です。

——いずれも華々しい活躍で、大阪桐蔭の名を全国にとどろかせましたね。

森山 ただ、私はそういう戦績もさることながら、どのクラブの生徒も全員、謙虚で礼儀正しいことのほうがうれしいし、大切なことだと思っています。野球部でも、これが今年の優勝校の生徒たちかと思うほど、謙虚な生徒ばかりです。自分たちの実績におごるところがありません。先日も夜、野球部の寮に立ち寄ったのですが、その日の夕方に大分国体から戻ったばかりというのに、夜間練習に取り組んでいました。

——スポーツ芸術コースでは、吹奏楽部の活躍もすばらしいですね。

森山 クラブ創部後2年目で全日本吹奏楽コンクールに出場して銀賞受賞ですからね。今年は関西大会で金賞を取ったものの全国コンクールには行けませんでした。マーチングバンド大会に挑戦して、



吹奏楽部

2年目にして見事にこの夏の関西大会で、全国大会に出場できる4校の枠に入りました。

——立派なシンフォニックホールもできました。

森山 吹奏楽の部員には練習場所で苦労をかけたからね。とくに、総勢100人以上で行進するマーチングバンドの練習は広い場所が必要で、サッカー部の練習が終わるのを待ってからグラウンドを使わせてもらうといった状況でした。ただ、学校として設備面の充実に取り組むことは重要ですが、「足るを知る」ということも重要です。練習場所などの困難を練習の仕方等の創意・工夫で乗り切ってこそ、ほんとうの強さ、真の実力が身につきます。マーチングバンドの生徒らも、日曜日に登校して一生懸命練習していますし、その同じ日曜日に、校舎の中では真剣に勉強している生徒もいます。そういう光景を見ると、生徒たちが互いの存在に刺激され、切磋琢磨していることが実感できます。

——今後の目標はいかがでしょうか。

森山 学業では東大や京大に50人進学させることが今年度の目標です。この先5年程度で、それを100人程度に持って行きたい。京大に100人進学者を出すことができれば京大合格日本一です。進学だけが目標ではありませんが、それも立派な目標の一つで、東大や京大はもちろん、世界の大学をめざして頑張っていけばよいと思います。人には持って生まれた能力の差や得手不得手があるものですが、その2倍、3倍、勉強する、練習することで、その差は克服できるのです。

森山 学校を発展させるには、今いる生徒たちをいかに大切に育てるかが重要だ、という意識を教員に徹底しました。そのためには厳しさも必要ですが、愛情もそれ以上に必要です。生徒たちの成績が伸びないとすれば、それは教員、学校の責任です。子供たちが勉強しないというのは、勉強するように持っていけない教員、やる気を引き出せない学校が悪いのです。そういう覚悟で取り組んできたことが、今日の成果につながったと確信しています。

——分校開設の5年後には、大阪桐蔭高校になったわけですね？

森山 もともと、何年かすれば生徒数も減るはずでしたから、いずれ分校は本校に戻すという話だったのです。しかし、今お話しした学業面をはじめさまざまな成果が出て、学園としても一校の学校として独立させてさらに発展をめざそうということになったのです。学校名を桐蔭に変えたことで以前とは違う志願者層も増えて、さらにレベルが上がりました。

●活躍におごらぬ謙虚さがうれしい

——平成7（1995）年には中学校も開設されて中高一貫校になりました。

森山 生徒の学力を伸ばすには、やはり中高一貫が良いということです。中学進

かわら版からNEOSUへ

「大産大かわら版」が「学園ニューズレター NEOSU」に生まれ変わりました。

広報誌新タイトル（題字）案は「かわら版」前号（第29号）で募集しました。読者のみなさんから寄せられた応募作をはじめ、編集部員案、事務局員案などから選考させていただきました。採用の「NEOSU（ネオス）」は編集部関係者の提案で「NEO（新しい）」と「OSU（大阪産業大学の略称）」を結合した造語です。創立80周年を迎えた学園が新時代を切り開く意味を持たせたもの。「新しい時代の学校法人大阪産業大学」を象徴するタイトルです。



●学園全体の広報誌に

タイトルだけでなく中身も大幅に変身しました。

「NEOSU」は大学・短大だけでなく中・高校も含めた学園全体の広報誌となりました。中学から大学までの幅広い情報を掲載します。学園の一体感を強く感じる事が出来る誌面を目指します。

新広報誌「NEOSU」は、これまで以上にタイムリーな報道が出来るよう

学生の情報発信の視点で

になります。「かわら版」は年4回発行の季刊誌でしたが、「NEOSU」は年6回発行の隔月刊とします。新鮮でホットな内容を掲載します。

●小型でおしゃれに

見た目も大きく変わりました。「NEOSU」を手にとった皆さんは、手軽でおしゃれな誌面を実感してもらえると思います。大型で新聞スタイルの「かわら版」に比べて、小型の雑誌スタイルです。情報誌などと同じA4

サイズ。写真を大きく扱ったビジュアルなレイアウトを採用し、記事もこれまでの縦書きから横書きに変更しました。

●学生が編集に参加

そして、何より大きく変わった点は「NEOSU」の編集に学生参加が実現した点です。「学生責任編集」のページは学生が自力で作成しました。プロジェクト共有として活動する学生による学生編集会議を中心に取り組んでいます。今回掲載した「スタンフォード大学からの留学生」の記事は、学生編集会議の中で出た話題がきっかけ。「米国の超有名大学の学生が大産大で車作りに取り組んでいる」という情報が学生の興味を引き、「なぜ大産大に来たのか」「どんな学生なの」「どんな勉強をしているのだろう」と疑問に答えるべく学生自身が取材に取り組みました。記事執筆、写真撮影はすべて学生の仕事です。学生自身が情報発信する見事な記事が出来上がりました。読み応え十分です。

「NEOSU」第1号は学園創立80周年記念の誌面です。古谷理事長、籠谷学長、平岡校長、森山校長のインタビューを中心に80周年の伝統の重みと、将来に向けてのビジョンを語ってもらいました。80周年の節目に当たって学園が新時代に踏み出す決意と意気込みを感じさせてくれます。学園とともに新しいページを開く学園広報誌「NEOSU」にご期待ください。

編集長 山名康弘(客員教授)
e-mail: kouhou@cnt.osaka-sandai.ac.jp

皆さん、NEOSU編集に加わりませんか。
学生編集会議メンバー募集！

問い合わせは—— 学園広報課（本館9階）

e-mail: kouhou@cnt.osaka-sandai.ac.jp まで。

募集中！